The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	王維の話
Author(s)	橋本, 循
Citation	懐徳. 1956, 27, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90295
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

王維の話

橋本循

一

唐の王維に「與二魏居士一書」といふのがあり、そのなかで。次ぎのように云つてゐます。

古之高者曰二許由一、挂二瓢于樹一、風吹レ瓢、惡而去レ之、聞二堯讓一、臨レ水而洗二其耳一、耳非二駐レ聲之地一、聲無二染レ耳之跡一、惡レ外者垢レ內、病レ物者自レ我、此尙不レ能レ至二于曠士一、豈入道者之門歟、降及二嵇康一亦云、頓纓狂顧、逾思二長林一、而憶二豐草一、頓纓狂顧、豈與レ俛二受維縶一有レ異乎、長林豐草、豈與二官署門闌一有レ異乎、異見起而正性隱、色事礙而慧用微、豈等同二虛空一、無レ所レ不レ遍、光明遍照、智見獨存之旨邪、此又足下之所レ知也、近有二陶潛一、不レ肯二把レ板屈レ腰見二督郵一、解二印綬一、棄レ官去、後貧乞レ食、詩云、叩レ門拙二言辭一、是屢乞而多慙也、嘗一見二督郵一、安二食公田數頃一、一慙レ之不レ忍、而終身慙乎、此亦人我攻レ中、忘レ大守レ小、不レ□二其後之累一也、

この意味を一寸申し述べて見ませう。

遠い昔の堯の時代に許由といふ高士がゐた。かれ許由は樹の枝に掛けて置いた瓢が、風に吹かれて鳴る音が喧しいと云つてこれを棄てた。また堯が天子の位を許由に讓らうとした時に、そんな話は聞くのもいやじや、わが身は汚されたと云つて、流水のほとりに往き耳を洗ひ清めたといふ話が傳へられてゐる。が、しかし、この許由の物の考へ方はどうであらうか。わしはどうも感服せん。一體、耳のなかに、いつまでも聲が留つてゐるわけでもな

し、又た聲が耳を染めて浸み込むといふわけでもない。したがつて耳を洗つたところで詮ないことである。それよりも心の持ち方が肝腎であらう。といふのは、そも〳〵われらの五官は外からの事象によつて搖り動かされ、その結果、是非、善惡、美醜、好惡などの區別や判斷をする。しかし、かうしたことは、云ふならば、妄惑が心性を垢がし、我性に執着するがためである。さういふことでは、まだ悠然自得の曠士といふことはできぬ。どうして道に入るものゝ門徑とすることができやう。時代は降るが晉の世になつて嵇康字は叔夜といふものがあつた。竹林七賢の一人である。性に任して、したい放題のことをなし、役人となつて仕へることは好まなかつた。曾て友人の山濤字は巨源、これも竹林七賢の一人であるが、この山濤が嵇康に役人となつて仕へたら、どうかと勸めたことがある。その時、嵇康は吾れを理解せざるも甚しいとなし、山濤に絶交の書を與へた。その一節に次ぎのやうに云つた。

禽鹿少見二馴育一、服二從教制一、長而見レ羈、則狂顧頓纓、赴二踏湯火一、飾以二金鑣一、饗以二嘉肴一、遂思二長林一、而志杜二豐草一也、

卽ち小鳥や鹿でも、幼少の頃から飼ひ馴らして育てたならば、飼主の教へに服從するけれども、一たん成長してから羈束しようとしても、じたばた躁いで纓を頓り、湯火の中に陷ち込んでも、束縛から逃れようとする。黃金の鑣を以て飾つても、うまい食物を與へても、そんなことには見向きもしない。却つてかれらをして、もとの棲家である深い林を思はしめ、平原の豐草を慕はしめることになるものである。人間もこれと同じだ。性情の赴くまゝに任すがいゝ。われの如き隱逸の志を抱くものに對して、どんな榮祿を以て束縛しやうとしても、何らの効果もない。却つて我が隱遁の志を助長せしめるだけである。

嵇康はこのやうに云つたが、これも亦た是非の見、好惡の情に拘はれた物の考へ方である。妄惑を去り、我性を離れたならば、狂顧して維がれてゐる紐を頓ることも、甘んじて維がれてゐることも、どちらにしても區別はな

いわけだ。同様に長林豐草の中を自由に飛び廻つてゐることも、役人となつて官署の中に勤めの身となつてゐることも、何らの相違もないわけである。結局心の持ち方一つであつて、何れが是、何れが非といふやうのことではなく、さういふ考へ方こそ、自我に捕はれ、外物に拘つた見方である。妄執から離れ、自己を空しくしたならば、是非善悪もなく、美醜好悪もない。差別の心が起ればこそ、物の眞性は隠れ、外物に捕はれゝばこそ、空朗なる心の働きが衰へるのである。無差別平等は虚空に同じく、虚空なれば物に遮られるといふことはなく、されば光明遍く照して、知見常に存するといふことになる。これは足下の知られるところである。更に時世が降つて、東晉の末に陶潛字は淵明なるものがゐた。かれは板（券のこと）を把り、衣冠束帶し、腰を屈して督郵（郡守の佐史で、屬縣の愆尤を督察す）に見ゆることを欲せず、印綬を解き官を棄てゝ鄉村に歸つた。が、それから後は生活に窮し、他人の門に食を乞うて歩いた。その時の詩に「乞食」というのがあり、その中で「叩ゝ門拙三言辭」といふ。是れは、いつも食を乞うて歩くので甚だ心に慙ぢたからである。そこで、もし彼が曩に督郵に見えてゐたならば、數頃の公田からの收穫で氣樂に生活ができたのであるが、之を慙ぢて忍ぶことをしなかつたために、今度は他人に食を乞うて終身慙づかしい思ひをせねばならなくなつたのではないか。この陶潛の場合も、人と我という對立的な考へに捕はれたがために、凡ては虚空であるという大なる道理を忘れ、小さい己れに執着して、遂に其後の累に思ひ及ばなかつたのである。

大體かういふことであります。これは魏居士なるものが、高い德、清い節を有しながら仕進を陋しむべきことゝ考へ、山棲谷飲、高居深視してゐたのに對し、王維が仕進を勸奬した手紙の一節であります。

そこで、われ〳〵は之を讀んで、王維の人生觀と申しませうか、處世の態度、或は其の心構えが、どんなものであつたかをはつきりと覗ひ知ることができるやうに思ひ甚だ興味深いことゝ存じます。

つまり、自分自身を含めての凡ての物に對して無差別的な考へ方、云うならば、あらゆる概念に捕はれないところ

の心の持ち方、かういふ物の考へ方は佛教的な空の考へ方とも云ひ得るでありませう。又、老莊的な無の考へ方とも云へるでありませう。

二

王維は熱心な佛教信者でありました。もつとも唐は佛教の盛んな時代でありまして、殊に太宗（六二七―六四九）から玄宗（七一三―七五五）にかけての間が隆盛を極めた時であります。當時の大官や文人學士で多少なりとも佛教思想の影響を受けないものは無いと云つても宜しいのであります。玄宗の開元、天寶時代、卽ち王維と同時代に生きてゐた文學的人物、それは李白、杜甫を始め、裴迪、李頎、儲光羲、孟浩然など、何れの作家にも、香閣蘭若に遊んだ作とか、上人比丘を詠じた詩とかの無いものはありません。佛教が一世を風靡した時世でありました。かういう風潮の中に生きてゐた彼がその影響を受けたであらうことは云ふ迄もありませんが、更に王維の家庭は佛教の篤信者の集りでありました。「請二施レ莊爲ヲ寺表一」に依りますと、母の崔氏は大照禪師といふに師事すること三十餘年でありまして、常に褐を衣て蔬を食ひ、戒を持し禪を守り、山林に住むを樂しみとなし、志は靜寂を求めるといふ信者でありました。王維は此の母のため藍田縣に一ケ所の山莊を造りました。そこには草堂や精舍があり、竹林果園もありました。母の死後、嘗て母の宴坐の跡や經行の所を見るにつけ、追慕の情に堪えず、永劫追福のために、この莊を布施して寺といたしました。宋の宋敏求の長安志によりますと、この寺は藍田縣南輞谷にあつて淸源寺と稱へたのであります。

維の弟の王縉字は夏卿も並々ならぬ佛教信者でありました。門下侍郎とか中書門下平章事という大官になつた人であります。舊唐書の本傳に「縉の弟兄、佛を奉じ、葷血を茹はず、縉の晩年尤も甚し」とあります。財を捨てて寺を造ることは際限がなく、妻の李氏が卒すると、追福のために道政里の邸第を捨てて寶應寺といたしました。また縉は當時の權力者の元載や杜鴻漸と共に、代宗に對して佛教の福業報應の事を啓奏して、佛教信仰に引き入れました。代

宗は、それから佛教に凝り固つて澤山の僧侶を宮中に入れて、佛像を陳設し、經行念誦せしめることゝなりました。そこを內道場と稱しました。かくて僧侶の勢力が宮中府中に蔓つて、終には公卿と權を爭ひ威を擅にするものも出て來るといふ鹽梅であつた。安祿山や史思明が、それ〴〵己れの子供に殺されたことなどは、すべて所謂業報であるというやうのことを聞いて、代宗の信仰は愈々甚しくなり、公卿大臣も既に業報は避くべからざるものであるからという譯で、人事は棄てゝ修めません。其他、縉の爲したところを考へて見まするとこれはまともな信仰ではなくて、狂信の域にあつたと思はれるのであります。そこで新唐書の縉の本傳の中には「太曆代宗年號の政刑、日に以て堙陵せしは縉と元載杜鴻漸とが之を倡へしなり」と云ひ、舊唐書は更に「其教を傷りしの源は縉に始るなり」と申して居ります。

ともかく以上の如く王維の一家は、極めて熱烈な佛教信者が揃つてゐたのであります。

かういふ家庭に育つたことが彼を佛教信者たらしめた大きな緣由となつたでありませう。更には前述しましたが、當代の佛教流行の風潮の影響もありませう。しかし、王維の場合に於ては、さうした外界の緣由や影響よりも彼れ自身の個性或は天性が、佛教的な哲學思想に沈潛するに最も適した素質を有してゐたのではないかと思ふのであります。「酬二張少府一」の詩で、

晚年唯好レ靜、萬事不レ關レ心、自顧無二長策一、空知レ返二舊林一、松風吹二解帶一、山月照二彈琴一、君問二窮通理一、漁歌入レ浦深、

と歌つてゐます。漁歌とは申すまでもなく、屈原の「漁父」に、滄浪之水淸兮、可二以濯一吾纓一、滄浪之水濁兮、可二以濯一吾足一、とあるのを指してゐるのであります。あなたが私に尋ねられる、人間には窮境に陷るものと、榮達するものとがあるが、如何なる方法で世に處したらよからうかと。私はこの漁歌を以てお答へするだけのことである。といふのであるが、こゝにも、嚮に述べました「與二魏居士一書」にあるやうな思想が流れてゐるのを知るのであります。つ

まり、窮とか通とか、淸とか濁とかいふ考へ方からは超越してゐる。置かれたる環境によつて心を援されることは、我性のためだといふ信念が見えるのであります。

また彼と苑咸との贈答の詩があります。

苑舍人能書二梵字一、兼達二梵音一、皆曲二盡其妙一、戲爲レ之贈、

王維

名儒待レ詔滿二公車一、才子爲レ郎典二石渠一、蓮花法藏心懸悟、貝葉經文手自書、楚辭共許勝二揚馬一、梵字何人辨二魯魚一、故舊相望在二三事一、願君莫レ厭二承明廬一、

荅詩并序　苑咸

王員外兄、以二予嘗學二天竺書一、有二戲題見レ贈、然王兄當代詩匠、又精二禪理一、枉二採知音一、形二於雅作一、輒走レ筆以酬焉、且久未レ遷、因而嘲及、

蓮花梵字本從レ天、華省仙郎早悟レ禪、三點成レ伊猶有レ想、一觀如レ幻自忘レ荃、爲レ文已變二當時體一、入レ用還推二間氣賢一、應下同二羅漢一無レ名欲上、故作二馮唐一老二歲年一、

苑咸という人のことは唐書藝文志の別集類の部の苑咸集の註によれば、京兆の人であります。

この贈荅の詩を見まするとと、苑咸は梵字も書き、梵語も讀んだ人でありまして、勿論佛學に深く通じてゐたのであります。そういう無生の學に打ち込んでゐる人でありますから、普通に考へれば、俗界の官吏などになつて、經世の實際に携はるというやうのことには、興味も持たず、また適しても居らぬであらうと思はれるのであります。そういふ苑咸に對して、君は蓮花の法藏を讀んで心に悟りを開き、貝葉の經文を手づから書かれる人であるから、官吏たることは好まれぬかも知れんが、故人舊知は君が三公の位に登られて、治世の任に當られることを待望してゐると云つたのであります。

これに對する苑咸の荅詩には、王維に對して次ぎのようなことを云つてゐます。あなたの心持は阿羅漢が佛道修業の結果、俗世間の名譽や欲望には何の執着も持たないと同じであらうのに、さらばとて、特に異を樹てゝ役人生活を逃れようともせず、わざと漢の馮唐が年寄るまで官吏となつて忠誠を勵んだが、そのようにいつまでも默々として平凡にして俗惡な官吏生活を續けて居られることである。というのであります。そこで、王維が重ねて苑咸に荅へた「重酬二苑郎中一」という詩があります。

何幸舍レ香奉二至尊一、多慚未レ報二主人恩一、草木豈能酬二雨露一、榮枯妄敢問二乾坤一、仙郎有レ意憐二同舍一、丞相無レ私斷二掃門一、揚子解嘲徒自遣、馮唐已老復何論、

これに據りますと、王維の心持ちは、官吏として、大した榮達を望んでゐた譯でもないらしく思はれます。榮枯盛衰は天命である。自分はそのために、特別に漢の魏勃が曹參に面會を求める手段として、曹參の舍人の門外の掃除をしたという話があるが、そんなことをしたいとは考へない。また自分は他人が何と噂をしようとも漢の揚雄のように、それに對して辨解をしたり、自己宣傳はしたくない、といふのであります。

三

これらの詩を通じて知ることのできる王維の人生の見方、處世の態度は、やはり「與二魏居士一書」の中に見られるものと同じであります。彼れは己れが仕進の身を以て特に名譽であるとか、榮華であるとかは考へません。また不名譽とか、つまらぬことだとも考へません。そんなことは考へてゐなかつたのであります。出でゝ仕進の身とならうが、退いて隱逸の境に入らうが、そんなことは自我を沒却してゐる彼の心を喜悲せしめるに足らなかつたのであります。從つて經世濟民というような理想も無かつたでありませう。また世の俗惡を嫌惡して、山林丘壑に逃れようといふよりのことも考へなかつたでありませう。これは佛敎の所謂空寂淸淨ということを確く信じ、さうした見地から凡

てのものを眺めた自然の結果であらうと思はれます。「胡居士臥レ病遣レ米因贈」の中で、了二觀四大因一。根性何所レ有。妄計苟不レ生。是身孰休咎。と云ひ、有無常斷見。生滅幻夢受。卽病卽實相。趨空定狂走。無レ有二一法眞一。無レ有二一法垢一。と申して居ります。これ亦た一切が空寂であることを述べたものであります。殊に卽病卽實相。趨空定狂走とか、無有一法眞。無有一法垢と申して居りますのは、有に執らわれず、無に偏らないことが空寂であることを述べてゐるのであります。餘程遠く佛敎を研究して、その眞諦に達してゐたものと見えます。且つ彼は觀念的に之を知つたばかりではありません。彼の人生觀は佛敎によつて形成されてゐたのであり、その處世の態度は佛敎によつて導かれてゐたものと思はれるのであります。明の焦弱侯の筆乘には、以上の語を引用して「その見地の超然たるに非れば、安んぞ能く空を鑿ちて此を道はんや」と云つて居るのであります。

四

昔から詩人の中には、山林自然の裡に入つて嘯傲自適を樂しまうとしたものが少くありません。そして、それが、いかにも塵俗世界から超脫する手段のやうに思はれてゐたのであります。かういふ文人の態度は、遠く後漢の末から六朝にかけて盛んに行はれ、ずつと近世まで續いてゐました。さういふ考へは、老莊の道學や佛敎の思想的影響に負ふところ頗る大なるものがあるのであります。然し、さうした隱逸詩人とか自然詩人乃至山林詩人が、眞に果して、境遇の榮枯に無關係に、俗世間から逃れた人ばかりであつたかといふに、却つて仕進しても榮達ができなかつたとか、己れの仕へてゐた朝廷が崩壞したとか、ともかく己れの境遇に不平憤懣の念を抱いてゐた人が少くないのであります。又、或は隱逸放浪を以て高尙自由と考へ、もしくはその美名を得やうとしたものもあります。云ふならば、俗世間に對する名利の執着の念が斷ち難い、しかもそれが得られないことから、却つて反射的に山泉丘壑の境に入つたとも考へられるのがあるのであります。

陶淵明、謝靈運から唐の自然派詩人と稱せられるものは程度の差はあつても、すべて以上のような動機から世を遁れたたと見られる節があるのであります。さういふ退嬰的な遁世の心に對して、佛敎思想は都合よく內觀と慰安の機會を與へてくれる。延いては香閣精舍の古松慈竹の間に遊ぶことを愛することにもなります。おのづから、佛敎的思想のただよつてゐる詩を作ることにもなります。が是を以て、其の人生觀が佛敎思想で形成され、その處世の態度が、飽くまでも佛敎思想で導かれてゐた王維と、思想の本質までも同じであつたと考へることはできないのではないかと思ふのであります。王維はみづから「吾生好二靜淨一」（戲贈張五弟諲）と云ひ、「晚年唯好レ靜」（酬張少府）と云ひ、「已悟二寂爲レ樂。此生閒有レ餘。思歸何必深。身世猶空虛」（飲餐釜山僧）と云つてゐます。前にも彼の悟境の深いことを申しました。眞に彼は此世を空寂と觀じ、空虛と悟り、靜淨を好んでゐたのであります。しかも、不平憤懣があつて、この心境に逃れた譯でもありません。「吾れ生れながらにして靜淨を好む」だのであります。こゝが王維の他の詩人と異る點であります。王右丞集箋註の撰者である淸の趙松谷は、その序で、

天機淸妙にして物と競ふことなし、人事の升沈得失を擧げて、以て其中に膠滯せず、故に其の詩を爲るや、眞趣洋溢して凡近を脫棄す。

と申してゐます。又、松谷の兄の趙殿最も序の中で、

右丞禪理に通ず、故に語に背觸なく、中邊に酣徹す、空外の音なり、水中の影なり、

と申してゐます。これらの評語は、彼の作品はその禪悅を通して詠じ出だされたものであることを述べてゐるのであります。俗界の紛雜に對し、滿たされざる煩惱を慰さめんがために、また之を發散せしめんがために、詠じ出されたものではないのであります。

さうした淸凉な心地を有してゐた彼の詩は「冲澹自然、洵に有唐至高の境なり」（養一齋詩話卷一）と云はれるのであります。自我の意識を交へずして靜かに自然人生を觀照したのであります。然し、その反面、朱子の「詞は淸雅なりと雖

も、亦萎弱にして氣骨なし」（悲辭後語）といふ批評もあります。何しろ參禪悟佛、冷然獨往の詩人王維と、窮理居敬の學を說き、國事を憂ひ、時政を慨し、節義凛然、忠厚の念の篤かつた朱子とでは、殊に朱子は佛教を排擊しましたが、人生觀も處世の態度も異なつてゐます。何れが是何れが非といふことはできません。たゞ王維は此の如き詩人であつたといふことを申し述べた次第であります。